

## 巻頭言

心理臨床センター所長 松 田 真理子

今年度で心理臨床センター紀要は第27号となり、諸般の事情により電子化することになった。様々な学会誌や大学の紀要、報告書の電子化への移行が急激に進んでいる。何事も長所と短所は背中合わせであるため、電子化によってより多くの研究者やそのテーマに関心のある人々からのアクセスが可能になる一方、守秘義務の遵守や内容の取扱いに対してより細心の配慮が求められることになる。また電子化を前提とすると本来、書きたかったことを控える場合もあるだろう。

心理臨床センターは大学院生の教育と地域貢献が2つの大きな柱となっており、ケースの依頼があることで院生は臨床実践の場を得ることができ、院生の臨床実践は地域で暮らす人々の生活や人生を支えるという両方向の循環がバランスよくなされるのである。しかし昨今では新規ケースの申し込みに或る変化が起きている。発達検査、知能検査など検査依頼は2024年度は前年度に比べ激増したのに対し、できるだけ経済的負担を減免し提供している減額ケースの申し込みが減少している。発達検査に関してはどの医療機関も3か月待ち、半年待ちは一般的であるため、心理臨床センターへの検査申し込にそのニーズの高さが反映されている。一方、かつては不登校を主とする親子並行ケースの申し込みが多かったがここ数年は例え減額であっても新規ケースの申し込み数が減少している。その背景には不登校をかつてほど問題とせず学習支援を重視する学校現場の潮流があると考えられる。さらに昨今の不況により例え減額であっても家計が苦しく、食費や生活費に充当するためカウンセリングにかけられるお金は抑制されてしまう場合もあるだろう。このように心理臨床センターでの新規申し込みの内容や数は時代を映す鑑と捉えることもできるだろう。

臨床実践では抑圧、あるいは隠蔽されていた真実、真理が浮かび上がることがある。真実、真理と向き合うことで閉塞状況が打開されることもあれば、真実と直面する破壊的な力によりさらなる方向喪失に陥る場合もある。直面化するか、先延ばしにするかは時熟を識別する眼力とも関係している。

妙木浩之は「見るなの禁」に関する北山修の『悲劇の発生論』（1982）を紹介し洋の東西を問わず、「見るなの禁」は神話、説話、民話の中で登場するが、河合隼雄（1982）は『昔話と日本人の心』の中で西洋ではギリシャ神話のアモールとプシケのように禁を破るのは女性であり、日本ではイザナギとイザナミ、鶴女房のつうと嘉六のように禁を破るのは男性であることが多いと指摘している。西洋では見るなの禁を破った女性が艱難辛苦に耐え、自己実現していくのに対し、日本では「見るなの禁」を破られたところで女性が去って行き、男性は取り残されて物語は終わってしまう。秋田巖は原田マハの『カフーを待ちわびて』（2008）の公友寄明青の「何も求めない」「何も知ろうとしない」態度により「見るなの禁」は存在しようがなくなり、禁じていた側の女性は異類女房でなくなることを指摘している。彼等が求める幸せとは「皆が幸せ」になることであり、個人を超えた祈りが捧げられる時、存在そのもの、在り方に変容が起こることを指摘している。秋田は人知れず、遠い遠いところで祈り続けてくれる「Praying Anima」の概念を呈示し、日本人は西洋人に比べ、自分のために遠いところでそっと祈ってくれている存在に気づく能力に長けていると述べている。

一方、西洋では思想家テューヌは想像力を見ることで生まれるとし、フェルナンド・ペソアは『不安の書』の中で「考えるとは、眼の病気だ」「本質的なことは見ることを学ぶことだ／考えずにみることを／見ている

ときに見ることを学ぶことだ」と謳い、リルケは『マルテの手記』の冒頭で「僕はまずここで見ることから学んでいくつもりだ」と記している。画家ルドンは「眼で見る能力、正しく真実を見る能力を発達させていない人は、不完全な知性しか持たない」と記している通り、「見ること」は詩人や芸術家にとって核心的なことである。一方、旧約の神 YHWH が『出エジプト記』で彼の民に神の名を呼ぶことも姿を見ることも禁じたように、神＝真理を見ることは人間にとっては尊大なことであり、命を失う危険がつきまとうと考えられる。

さらに妙木は日本語の特徴としてのあいまいさ、両義性、両面性も指摘している。例えば主語が省略可能である。孤立語、膠着語、屈折語のなかで、膠着語の特徴を使って、語尾に意味変化があることも挙げている。柄谷行人は日本の言語学者である時枝誠記を取り上げ、日本の近代言語学はヘルダー、フンボルトのドイツから導入された歴史的言語学が基盤となっており、この過程で 18 世紀後半以後、国学者が築いた言語学が斥けられたことを指摘している。日本の近代言語学は西洋の文法を膠着語である日本語に機械的に適用させるものであり、それは自然科学的であり、国家主義的であったと指摘している。

臨床実践には記録がつきものである。私たちが記録するカウンセリングの内容はクライアントとカウンセラーの共同作業の賜物である。そして当たり前のように使っている日本語の特徴や成り立ちを認識することは自分の臨床を見つめ直す根本にも繋がっていると考えられる。